

ジャガイモと映画 (16)

<盗む (1)>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

ジャガイモ泥棒の見られる映画につきホームページに書いていた頃、大船団を組んで日本近海にやって来てサンゴを根こそぎ捕って行く海賊的窃盗が横行していた。それと比べれば、泥棒とも呼べないような、困窮者が困りはてて、“すみません”、といたくなるような映画を拾ってみた。

60 『北の桜守』

2018年、邦画。監督：滝田洋二郎。

太平洋戦争末期の1945年5月。南樺太^{からふと}(現サハリン)に暮らす江蓮^{えづれ}てつ(吉永小百合)は、庭に大切に育てていた桜の花が咲いたことを夫や息子たちと喜ぶ。しかし、夏に至り日本の敗戦が濃厚と読んだソ連軍が日ソ不可侵条約を破って侵攻してきたため、てつは、現地に残る夫との再会を約束し、息子を連れて南へ逃げる。

終戦となり、樺太からの引き揚げ船「小笠原丸」で北海道に向かう。歴史に照らしてみると、船は稚内^{わっかない}で下船しなかった引揚者約600人を乗せ小樽港^{ましけ}へ向けて出航する。しかし、増毛沖で、何故かソ連潜水艦の魚雷的^{めい}とされ、兄だけが亡くなる。

北海道白滝村に落ち着き、女一人で息子と暮らす。極貧のため近所の悪ガキ達のいじめに会う日が多い。ある日、親子は空腹の極みでジャガイモ畑(映画の中の品種は

当時まだ存在しない「とうや」と推定される)の側を通る。息子の「腹へった、もう歩けない」の声を聞き、本能的にジャガイモに手を伸ばしてしまう(写真1a)。



写真1a ジャガイモ(とうや)を盗むてつ。

「泥棒はしてはいけない、でも、これは落ちていたのです」と言いながら、土の着いた生のジャガイモを二人で噛じる。その後、この地で二人とも飢え死にするよりは、息子の修二郎だけでも東京へ出て働き、食べて行けるようにと家から追い出す。

ところが、アメリカへ渡った修二郎(堺雅人)がハンバーグの会社で認められ、札幌に着任する。しかし、網走の世話役(岸部一徳)が訪ねて来て、てつの様子が変だと言う。彼女を引き取り、一緒に暮らし始める。修次郎は、ホットドッグストア「ミネソタ24」で、お袋の味のおにぎりも扱う

などコンビニのような経営をして多忙であるが、昔過ごした記憶を拾い集めるように二人旅を計画する。(映画ロケ時は白い)花咲くジャガイモ畑が懐かしい白滝村に立ち寄り、「たぬき」と言う店に入る。店主(笑福亭鶴瓶)は「これが意外と美味しいのよ」と言いながら、蒸かしたジャガイモ(品種:「とうや」)を半切りにした上にイカの塩辛を載せてくれる(写真1b)。



写真1b 鶴瓶が塩辛を載せてくれる

そして夫がシベリア抑留で死亡したとは信ぜず、家族で満開の桜を見たいと願望しているてつを連れて、さらに北へと向かう...

61 『チャップリンの独裁者』

(原題: The Great Dictator)

1940年、アメリカ映画。監督: チャールズ・チャップリン。

ドイツがホーランドに侵入して第二次大戦が勃発した時期に制作され、ヒトラーとナチズムに対して大胆な非難と風刺をしつつ、ヨーロッパにおけるユダヤ人の苦況をコミカルながらも生々しく描いたもの。当時、アメリカはナチの戦争とはまだ無縁であり平和を享受していた。映画完成時、日本はナチス・ドイツと友好関係にあった

ため公開されず、日本初公開は1960年となったものである。

この作品は、チャップリンの最初のトーキー作品として有名であり、彼の作品の中で最も商業的に成功したものと言われている。チャップリンは、架空の国トメニアの陸軍重砲部隊に所属する無名の二等兵(床屋のチャーリー)として登場する。トレードマークの山高帽、ステッキ姿がよく知られている。独裁者ヒルケルに支配されているトメニア国。ユダヤ人の床屋は、独裁者と瓜二つであり、間違われる。彼は、占領国での演説で平和を訴える。ナチズムの狂気とユダヤ人の迫害を批判する(写真2)。



写真2 監督・制作・脚本・主演を務めた

この中でナチス突撃隊がユダヤ人の八百屋から好きなジャガイモとケチャップに向きそうなトマトをゲットするシーンがある。ドイツ人特に北部の人々はジャガイモが大好き、トマトはケチャップにして食べる人が多い。床屋が女性ハンナの無い髭を剃ろうとしたシーンでは、ハンナの信仰が語られ、その後、ジャガイモを買いに出たハンナが蹴躓き、通りかかった突撃隊から親切を受けるところも見られる。

62 『さよなら、アドルフ』

(原題：Lore)

2012年、オーストラリア、ドイツ、イギリス映画。監督：ケイト・ショートランド。

ナチス・ドイツの勝利を信じていた人の映画ではあるが、原作はイギリス人の女性作家レイチェル・シーファアの「暗闇のなかで」であり、監督はオーストラリアの女性という、非ドイツ国の人が製作主導した映画である。

1945年、14歳の少女ローレ（ザスキア・ローゼンダール）は、ヒトラー大統領が亡くなったという母の言葉にショックを受け混乱する。父はナチス親衛隊高官であり、裕福な生活ができていた。しかし、やがて両親は連合軍に拘束され、ローレ、妹のリーゼル、双子のギュンターとユルゲンに加え、乳飲み子を取り残されてしまう。

敗戦を境にナチスに対する世の中の風向きは一変し、子供達は邪魔者扱いされることになる。そして、ギュンターがジャガイモを盗み、それを農家の夫婦に咎められた日、ローレは居候をやめて、弟妹をつれて、遥か900キロ離れたハンプルクの祖母の家へ行くことを決める。

バスなどの公共機関の無い時代のため、歩いて鉄道の駅を目指す。草原を歩き、空き屋に泊まり、めばしいものを食料に変え、赤ん坊の母乳確保に苦労する。食料を求めて入った家で老婆がおり、母の形見の宝飾品を渡すと、買い出しに行ってく来る。

老婆は赤子のペーターを可愛がり、双子のギュンターとユルゲンに歌を頼む。ふたりが歌うと、老婆は嬉しそうにし、「みんな手のひらを返して、総統に恩を仇で返したんだ」と激しく言う。貼りだされた写真で、ナチスの行ったホロコースト（ユダヤ人虐殺）の真実を知って困惑・葛藤した翌日、連合軍兵士に呼び止めらる。そこで出会ったユダヤ人青年トーマス（カイ・マリナ）だけがローレに優しく手をさしのべる。廃墟に居たときは、ジャガイモ、パン、洋梨などを手に入れてくれ（写真3）、川を渡る舟を漕いでもらうため体を提供しようとする所を救ってくれたりする。



写真3 ユダヤ青年がジャガイモなどを集めてくる

それまで当然のように蔑（さげす）んできたユダヤ人に助けられることになり大いに戸惑う。過酷な現実^{とが}に直面し、さまざまな経験を経た少女は成長しつつ、列車で祖母の元へたどり着くことができる。